小林多喜二と拓銀就職

倉田　稔

目　次

はじめに
1　北海道拓殖銀行へ就職
2　『クラルテ』発刊
3　卒業直後の状況
4　父の死
5　ヴァイオリン
6　音楽
7　家族
8　偽手紙事件
9　武田の『クラルテ』加入
10　『クラルテ』時代
11　整の大熊フィクション
12　銀行の女性たち

はじめに

本稿から，小林多喜二伝の第3部に入る。第3部は，彼の拓銀時代・大正時代である。本稿は，その冒頭であり，伝記(10)をなす。

1　北海道拓殖銀行へ就職

北海道の拓殖事業をすすめるために，政府と民間が協力して，北海道拓殖銀行法が可決された。設立委員は，政府関係者，東京を中心とした実業家，

道内の実業家，地主，からなっていた。

低利資金の金融機関として，1900年に北海道拓殖銀行（以下，拓銀と略す）が創立されたのだった。拓銀は，北海道と樺太の半植民地的開発のために設立された半官半民の特殊銀行であった。初め，資本金が300万円で，株式総数6万株，うち，2万株は政府が買い，皇室もすこし払い込んだ。申し込みは15倍にもなった。1924年には資本金が2千万円となった。大株主は内地人が多かった。こうして拓銀は内地資本によって作られたと言える。

拓銀は，普通銀行業務も行っていたが，不動産抵当貸付が主な業務であった。その目的は，「北海道の拓殖事業に資本を供給する」ことであり，開墾費用などの農業関係資金，商工業への資金を供給することであった。農業にたいする長期資金の供給を本務とし，普通銀行業務も認められた。こうして，政府の保護監督色の強い特殊銀行として設立された。農業に対する不動産抵当の長期貸付が，主要業務であった(1)。公共団体への無抵当の長期貸付もあった。それらは低利のはずであったが，それほどでもなかった。

拓銀は，国有未開地処分法に対応して，大資本家や大地主に対する融資を担ったが，中小資本家には冷たかった。拓銀は，大正末・昭和初頭に，融資の抵当流れで，いつの間にか寄生地主の側面を持つにいたった(2)。

小樽の銀行の歴史を記しておこう。

明治12年（1879年）　第四十四国立銀行は，小樽に支店をおいた。同行は，明治15年に第三国立銀行に合併した。第六十七国立銀行が，小樽支店を設置した。

明治13年　手宮―札幌間鉄道が開通した。

（1）『北海道拓殖銀行史』拓銀　昭和46年

（2）拓銀の所有農地と抵当農地について，琴坂守尚氏は表を作っている。小樽多喜二祭実行委員会編『ガイドブック　小林多喜二と小樽』新日本出版社　1994年25ページ。

明治22年（1889年）　田中銀行が，小樽支店を設置した。

明治26年（1893年）　日本銀行が，小樽派出所を設置した。

明治28年（1895年）　小樽貯蓄銀行が設立された。

明治29年（1896年）　日本商業銀行小樽支店が設置された。

明治30年（1897年）　余市銀行が，本店を小樽に移し，小樽銀行と改称した。

明治32年（1899年）　北海道拓殖銀行が設立許可された。小樽区制が実施された。第十二銀行小樽支店が設置された。

明治33年（1900年）　拓銀が営業開始した。

明治34年（1901年）　拓銀小樽支店が設置された。中立銀行（本店小樽）が設立された。

明治37年（1904年）　小樽一函館間の鉄道が開通した。

明治39年（1906年）　小樽銀行が，北海道商業銀行を合併し，北海道銀行と改称された(3)。

明治40年（1907年）　第四十七銀行小樽支店が設置された。稲敷商業銀行（本店茨城県）が，8月，本店を小樽に移す。稲敷商業銀行が，9月に，本店を札幌へ移し，泰北銀行と改称した。

明治45年（1912年）　中越銀行小樽支店が設置された。

大正3年（1914年）　不動貯蓄銀行が，小樽に出張所を設置した。
泰北銀行が，本店を札幌から小樽へ移転した。

大正6年（1917年）　農産物（えんどう・はっか・でんぷん，など）価格が暴騰した。

大正8年（1919年）　中立銀行が，小樽銀行と改称した。

大正11年（1922年）　小樽市制が施行された。三菱銀行小樽支店が設置された。

（3）北海道銀行は，後年，拓銀に合併。従って，今の北海道銀行ではない。

昭和3年（1928年）（旧）北海道銀行が，百十三銀行を合併した。

昭和4年（1929年）　小樽銀行が，北海道商工銀行と改称した

小樽では，明治12年(1879年)に，三井銀行，第四十四銀行，第六十七銀行が支店をおいたという説がある。だが三井銀行の小樽出張所は，明治13年4月開設である。第四十四銀行が明治11年8月で，小樽で1番早い。だがそれは，明治15年に第三国立銀行に吸収され，明治16年に函館山田銀行に営業を譲渡した。明治16年2月，函館山田銀行の支店が開設された。だが1，2年で引き揚げられた。明治17年に第三十三銀行が出張所を開き，明治23年に引き上げた。明治20年に第二十銀行，明治22年に北海銀行，明治23年に田中銀行が，支店を開いた。だが三井，田中，二十，北海しか永続しなかった。第二十銀行は，大正元年に第一銀行に吸収合併された。北海銀行は大正2年，第一銀行に営業を譲渡するまで続いた。田中銀行は大正7年に閉鎖した。その後，明治26年に第百十三銀行の支店が開かれた。明治30年に国立から株式会社になり，昭和3年，北海道銀行（後述）に合併された。明治26年，日本銀行の派出所が開かれた。日銀は，明治27年には出張所となり，明治39年に支店となった。明治28年に，小樽貯蓄銀行ができた。それは明治34年に閉店した。明治29年に日本商業銀行の支店が置かれた。日本商業銀行は安田系であり，大正12年に安田銀行となった。その後の富士銀行である。

屯田銀行も，明治27年に小樽支店を置いた。明治31年には本店を小樽に移した。明治33年に北海道商業銀行と改称した。明治27年，余市に余市銀行ができ，明治28年に，小樽支店を置き，明治30年に，小樽に移り，小樽銀行と改称した。そして，元・屯田銀行を改称した北海道商業銀行を明治37年に合併し，北海道銀行となった。これは戦前の北海道銀行であり，昭和19年に拓銀へ吸収合併された。だから現在の北海道銀行とは違う。

十二銀行が支店を明治32年に出した。本店は富山である。後，北陸銀行に合併された。第四十七銀行が，明治40年に小樽支店を開いたが，十二銀行に合併された。中立銀行が，明治34年に本店を小樽にして設立された。

大正9年に小樽銀行と改称し，昭和5年，寿都銀行と合併し，北海道商工銀行と改称し，その後，道銀に合併した。

泰北銀行が明治33年に札幌で設立された。大正3年に小樽に本店が移された（色内2の2，後に稲穂東7の11)。北海道殖産銀行小樽支店もあった。大正8年にできた銀行であった。大正3年，樺太銀行は小樽支店をもったが，昭和16年に拓銀が合併した。昭和16年，泰北，北海道殖産，北海道商工銀行は，道銀に吸収合併された。

北海道拓殖銀行は，明治33年に発足され，小樽支店は34年に設置された。

明治38年，北海道貯蓄銀行ができ，翌39年に小樽支店が開設された。明治41年に休業となった。だが明治42年に再開され，拓殖貯金銀行と改称した。その後大正11年に，北門銀行となった。それは後に拓殖銀行に合併された。

明治40年に，函館銀行小樽支店が設けられ，大正11年に函館百一三銀行に合併された。中越銀行が，大正元年に支店を出したが，後に，合併して北陸銀行になった。大正6年に不動貯金銀行支店ができ，後に，協和銀行となった。大正11年には三菱銀行支店が開設された。大正4年に第七銀行小樽出張所があった。第一銀行が大正元年に，二十銀行を合併した時，小樽に来た。大正の初め，不動貯金銀行が代理店を置いていた。大正6年に支店を置いた。横浜正金銀行が小樽出張所を大正11年に開設した。それは大正15年に支店になった。(越崎)

大正13年に多喜二が拓銀に就職したのだが，この年，拓銀の公称資本金は2千万円で，店舗23，うち樺太が5，行員が469名（同年12月）であった。拓銀小樽支店は，現在の小樽ホテルであり，その以前は「紳装」であった。建物の1階で業務を行っていた。地下室は行員に利用された。また2階

(4) 大津博士氏。

や3階も拓銀のものだった[4]。

北海道拓殖銀行は道内ではエリート銀行であった。最初，多喜二は札幌本店の総務部勤めとなった。その年，大学・高商・中学などからの新卒業生が，47人採用された。銀行では毎年新行員を本店で講習をさせた。だから，多喜二はまず札幌で1カ月の講習をした。武田は書いている。

「小林が小樽高商を卒業すると，すぐに北海道拓殖銀行の小樽支店につとめたとの噂を誰からともなくきくことが出来た。そういえば彼の背広姿を札幌でちょい〳〵見かけることがあった。札幌に本店があったから店の用件でやってきたのであろうか，ちんまりと小さなからだに合った洋服姿は，ひろびろとしたさっぽろの点景人物としてはあまりにも深い印象を私にあたえた。」

これは多喜二が1カ月札幌に通った時のことではあるまいか[5]。1カ月の講習の後，彼は本俸七〇円で小樽支店勤務となった。

チマは言う。「うちの主人が泰北銀行[5a]にお世話になってまして，その支配人が拓銀出身の方で，その方に頼んで［多喜二を札幌から小樽に］廻してもらった」[6]。ただし，「その方」のために多喜二の転勤が実現できたのかどうかは，分からない。

多喜二は，小樽支店では，はじめ計算係で，2カ月後に為替課（係）になった。この課には比較的長くいて，ついで調査課に転じることになる。ここには銀行をやめるまでいたが，短かかったから，初期の労作は多く為替課勤務時代のものではないかと，帖佐（小樽高商と拓銀の先輩）は推測している。調査係は，為替係よりも暇のある係だった。多喜二の銀行時代の年表を掲げよう。

---

(5) 武田「回想の小林多喜二」(『小林多喜二研究』日本図書センター　1984年，復刻版)　207ページ。
(5a) 原文は，台北とあるが，ミスプリである。
(6)『北方文芸』1968年3月号　48ページ。

1924年3月10日	拓銀	札幌本店に勤務
	本俸	70円
4月18日	小樽支店計算係	
6月	小樽支店為替係	
1925年4月1日	本俸	85円
1926年1月1日	〃	88円
1927年1月1日	〃	92円
1928年1月1日	〃	96円
7月	為替係から調査係へかわる	
1929年1月1日	本俸	100円
9月10日	調査係から出納係へ左遷	
11月16日	依願退職のかたちで解雇	

このころ，全国的に長者番付が作られ，発表去れ始めた。小樽でも作られた。大正13年度の小樽の長者番付はこうである（『小樽新聞』調べ）。大正14年から普通選挙が実現されたので，その直前である。（越崎）

東	横綱	板谷　宮吉	西	横綱	藤山　要吉
	大関	犬上慶五郎		大関	野口吉次郎
	関脇	石橋彦三郎		関脇	金子元三郎[7]
	小結	今井　六郎		小結	寺田　省帰

その他めぼしいところでは，東では前頭4枚目に木村円吉，十枚目に磯野進，西では前頭筆頭に青木乙松，二枚目に山本厚三，四枚目に河原直孝，九枚目に野口喜一郎，十枚目に高橋直治，十二枚目に名取高三郎，一四枚目に

（7）金子元三郎。海運業，肥料卸問屋であった。

寿原英太郎，二一枚目に山田吉兵衛がいる。

こうして誰が金持ちなのかを，日本人は関心を寄せるようになる。

2　『クラルテ』発刊

1924（大正13）年4月に，同人雑誌『クラルテ』第1集が発行された。多喜二が主宰した。毎号30ページたらずの雑誌であって，その標題は多喜二がつけた。バルビュスの小説『クラルテ』からとったのであった。『クラルテ』創刊号の扉には，バルビュスの「クラルテ」からの引用を載せた。『種蒔く人』の灯を小樽にかかげたのであった。第1号が4月発刊なので，多喜二は『クラルテ』の企画や編集をすでに在学中に，し始めていたわけである。

小林は，「自由になんでも書ける自分の雑誌が欲しくなったにちがいない。」「率直にいうと，銀行員は食うための手段で，小林は年来のひそかなる希望であった文学生活を『クラルテ』で踏み切ったのであった。」(8)

同人は，戸塚新太郎（短歌，小樽中学出），新宮正辰（一二銀行小樽支店勤務，小樽中学出），片岡亮一（短歌，高商生），島田正策（三菱炭売），平沢哲夫（詩），蒔田栄一（高商講師，庁商同期），斉藤未知二＝斎藤次郎（百一三銀行勤務，庁商同期），宇野長作（詩，島田によると高商で多喜二と同期。ただしそれは卒業期である。）であり，第二輯から武田　暹が加わった。10人である。『クラルテ』同人のあいだで，文学的な熱意はなかなかほんものにならなかった(9)。

蒔田は，東京外語を出て高商に赴任してきた。ハイカラで，日々黒い色のボヘミヤン・ネクタイをしめて登校していた。

この雑誌には自作原稿の合評会を経て載せるのが，不文律であった。中心

（8）武田「『クラルテ』時代」（多喜二・百合子研究会編『小林多喜二読本』新日本出版　1974年）

（9）土井大助『小林多喜二』汐文社　1979年

は多喜二で，皆の文学研究はすざましいものがあった。「クラルテ」は，小林多喜二の代名詞のようなおもむきがあった。(武田)

この雑誌には，「赤い部屋」欄があった。ストリンドベルグの同名の小説から取った。かつて多喜二は初め卒業論文をストリンドベルグにしようとしたほどである。ここに，多喜二は小説「暴風雨もよい」(三月筆) を出す。

島田は言う。拓銀に就職すると，多喜二は，また同人誌を出そうと言い出した。当時小樽では，小樽中学を中心に『群像』，短歌の同人誌としては『原始林』や『新樹』その他数誌に及ぶものが発行されていたが，この三誌がやや形をなしていた。それに『極光』も目だっていた，とも書く(10)。ほかにも和田寿夫や中村善作などが『創人』という雑誌を出していた。他［の雑誌］は内容的には貧弱なものばかりだったので，多喜二は，出すからには，断然立派なものにしたいと考えていた。

最初多喜二は，同人誌の題名を「断層」にするなどと言っていたが，結局「クラルテ」とした。島田はその理由を聞いていない。「特にイズムがどうということはなかった……。何とつけようか，という時にちょうどバルビュスの小説を多喜二が読んでいて，それで……」と，島田は言う。武田は言う。「小林自身はバルビュスのクラルテ運動を ―― そういう気持ちがあったろうね。ただ，同人の顔ぶれは一様でないから。俺は好きだからというんで『クラルテ』にしたんでしょうね。」(11)

売行きのことだが，発刊の意気込みは申し分ないのだが，あまり芳しくなく，その穴埋めはだいたい島田がした。

4　卒業直後の状況

野口七之輔（昭和3年高商卒）が『北方文芸』の発起人の中心だった。彼は北海商業卒だった。高商生たちの編集した『北方文芸』は2千部くらい発

(10) 嶋田『小林多喜二全集』月報2
(11)『北方文芸』1968年3月

行した。卒業後多喜二が小説を寄せた。高商生はほとんどこれを買って読んでいた。これを知らないと，高商では話題にならなかった。多喜二は後輩の高商生たちに影響を与えたのだ(12)。

高商生だった手島は，大正13年から昭和2年の状況を描く。「その頃の北海道は，経済界の不況に天災が重なって，道内一帯になんとなく物情騒然としたものがあった。

札幌の町など，そう思って歩いてみると，何処に行っても演説会というものに打ち当った。時にアナーキスト達の集まりの場合などは，血だらけになった弁士が，物凄い怒号のなかを警官にひきずられながら飛出してくるといった始末で……」あった。

「……新進気鋭の先生方というと，大方は自ら進んで共々にマルクス主義に関する講義などをやってくれていたのだから，そうしたことを綴り合わせて考えると，静かなるべき学問の堂といえども，実は世俗の動向に一切超然という状況でもなかったようである。」(13)

櫛田民蔵や大山郁夫のような最先端をゆく学者も，高商の大講堂に現れて，正規の講義をした。大山の演題は「政治と文化」だった。櫛田は数回にわたっての「資本論」の解説だった。

後の詩人・宮沢賢治が，多喜二卒業の直後，高商を訪れた。岩手県立花巻農学校教員であった27才の宮沢賢治が，修学旅行の統導者（引率者）として北海道を訪れ，生徒とともに小樽高商を参観した。大正13年5月19日から5月23日までのことである。その修学旅行復命書（抜粋）を見てみよう。

「午前九時小樽に着，直ちに丘上の高等商業学校を参観す。案内に依て各室を巡覧せり，中にはタイプライター練習室と，並びに取引実習室の，諸会社銀行税関等の各金網を繞らせたる小模型中に於る模擬紙幣による取引など，農事実習と対照して甚生徒の興味を喚起せり，商品標本室にては粗なる

(12) 板垣与一講話，小樽商大，1993年。
(13)『緑丘』41号　19ページ。

農業製造品と精製商品との連絡に就いて参考となるべきもの多く，殊に独乙の馬鈴薯を原料とせる三十余種の商品標本，米国の各種雑穀物を炙熬膨張せしめたる食品等に就て注意せしむ。十時半同校を辞し，丘伝いに小樽公園に赴く。公園は新装の白樺に飾られ，北日本海の空青と海光とに対し小樽湾は一望の下に帰す。且は市人の指す処，一隻の駆逐艦と二の潜水艦港内に停泊し多数交々参観に至れるを見る。ここ蘇に四十分間解散す。大なる赤き蟹をゆでて販るものあり，青き新しいバナナを呼び来るあり，身北海の港市に在るの感を深む。生徒等バナナの價郷里の半ばにも至らざるを以て土産に買はんなどと云う。……」(14)

5　ヴァイオリン

多喜二の父が，ある時，町を歩いているとき，米屋の前で小僧さんがヴァイオリンを弾いているのに出会った。ヴァイオリンというものはいいものだな，と思って，三吾にヴァイオリンを買ってあげたいと思い，小樽の古道具屋に行った。山田町の一角に古道具ばかり売っている所があった。

しかし，余り高いので買えなかった。そのことを多喜二に話した。「三吾にバイオリンを買ってやりたいんだけど，高いもんだな」。父がそういったのは，町に米屋の番頭さんで，仕事が終ると「宮さん宮さん」や「美しき天然」をバイオリンでギコギコやっていたのをきいて知っていたからである。三吾がまだ小僧で住み込みに行っていた時だった(15)。しかし，父はとうとう買ってやれないまま，死んでしまうことになった。

高商を卒業して初めて貰った給料の中から，彼は古道具屋で古いバイオリンを買って，弟三吾に贈った。父が亡くなって間もなくのことだった。三吾さんは言う。「ある日，兄は突然，本当に前ふれもなく，古道具やからヴァ

(14)『学園だより』93号　1933年，および高橋純解説。1－2ページ。；『校本宮沢賢治全集』にも，これに関する記事ありと，野沢敏治氏。
(15) 小林三吾「兄の思い出」(『小林多喜二全集』第4巻月報4　1982年10月) 12－13ページ。以下，口述文，と略記する。

イオリンを買って来て，わたしにやれというんです。」[16] 手塚は，三吾さんが音楽が好きな[17]，と書いている。だが，三吾さんへのインタビューによれば，好きだったわけではない。それまでバイオリンとは全く縁がなかった，と言う。こうして三吾がバイオリンを始めたのは，大正13年（1924年），14才くらいの時で，多喜二が銀行に勤め始めてからだった。

多喜二は父の話を忘れないでいたのである。ところが多喜二は父の考えとは少し違って，買ったからには趣味にやるというのではなくて，専門的にちゃんとやれというので，「それまでにわたしの方から一度だってヴァイオリンをやりたいなんていったわけではなかった」が，三吾を小樽の女学校の中川則夫という先生につけて習わせた。そういう点はほんとうにテキパキとやってあげた[18]。「わたしにすればなりゆきで，さっそく小樽の音楽の先生としては有名だった中川則夫先生の教えを受けることになった」[19]。

バイオリンは，弾くときに弓の毛に松ヤニを塗る。弾くと松ヤニがこぼれて楽器がよごれるので，終ったときにいっしょうけんめいに拭き取る。少し拭けばいいのに，三吾は小さいころだったから，ていねいにやっているのを見て，多喜二が志賀直哉の「清兵衛と瓢箪」を話してくれた。バイオリンを拭いている姿から，清兵衛が瓢箪を拭くのを連想したのであろう。それがとてもおもしろい話だった。ところが，多喜二が死んで，ずっとあとから三吾が作品を読んでみたら，淡々としていて全然おかしくなかった。多喜二は，当時の三吾に理解できるようにアレンジして話したのであろう。

三吾は，中川先生についた。週1回通った。1日4，5時間くらい練習した[20]。昭和5年に上京するまで，ずっとこの先生に習っていた。「もともと音楽ずきな兄でしたから，銀行から帰ってくると，まず，わたしの練習ぶり

---

(16) 三吾氏，口述文。
(17) 平塚英孝『小林多喜二』上，新日本出版。
(18) 口述文。
(19) 口述文。
(20) 三吾氏の小生とのインタビュー。以下，インタビュー，と略記。

や，進行状態をたしかめるという毎日でした。」[21]

6 音楽

就職してから多喜二は，家に電話をつけた。大正14年に小樽の加入電話は，3,500台であった。

小林多喜二は高商を卒業して，拓銀に就職し，月給というものをはじめて貰って，袋ごと母親に渡した。母親はそれを仏壇に供えて、拝んだ[21a]。

多喜二はまた給料から，蓄音機を買った。これは当時あまりなかった。母に，三浦為三郎のレコード，「江差追分」，「秋田おばこ」を買って上げた。すばらしいものだった。母はそれを，朝里から来て帰る行商人たちに聞かせた。

初めて買ったレコードは，ダブリ・ベラの「チゴイネルワイゼン」であった。次は，12インチ盤コロンビアの，トシア・ザイデルのバイオリンで，ブラームス「ハンガリア舞曲」，ドヴォルザーク「スラブ舞曲　2番」を買った。大変な感動であった。トシア・ザイデルについては，江藤俊哉(1927－）の父が彼に感激して，息子に「としや」と名づけたほどである。当時は，クライスラー[22]，メニューイン[23]，ハイフェッツ[24]有名だったのに。

多喜二たちは，本間キミ，くのひさこ「月光」[25]のレコードも聞いた。

ある時，多喜二と三吾と，いっしょに映画館へ行って，終って外へでてみたら吹雪になっていた。小樽駅でみんな列車を待っている。いつくるか分か

---

(21) 口述文。
(21 a) 桶谷秀昭『伊藤整』新潮社　1994年57ページ。
(22) Kreisler, Fritz(1875－1962)。オーストリア生まれ，アメリカのヴァイオリニスト
(23) Menuhin, Yehudi (1916－)。アメリカのヴァイオリニスト。
(24) Heifetz, Jascha (1901)。ロシア生まれ，ロシア革命後，アメリカにゆく。ヴァイオリニスト。
(25) 三吾，インタビューより。

らないから，多喜二は，「歩こうよ」といって歩き出した。道路は雪で全然見えなくなっているから，多喜二の足跡をなぞって離れないようにして行く。家が建っている所では鼻歌程度だったが，雪野原の何もない所へくると，多喜二は声をはりあげて，「マルセイエーズ」なんかをフランス語で歌った。それはみごとなものだった。三吾は，多喜二が赤旗をもって向こうへ歩いて行くような錯覚をおこしていた。

多喜二は，「ニーナの死」や「ジョスランの子守歌」，「オ・ソレ・ミオ」なんかを，ちゃんと楽譜をもって歌っていた。それらの楽譜は，表紙に絵のついた「セノオ」のものが多かった。

三吾がいっしょに絵をかきに行ったり，海へ泳ぎにいったりするときには，田谷力三がうたった「ディアボロ」という「岩にもたれたものすごい人は／鉄砲片手にしかと抱いて」とか，「アルカンタラの医師」という「恋のために身はとらわれ……波をけり風をつく，船人には海が家」とかいうものも歌っていた。それらの歌をうたいながら絵をかく多喜二の姿は，とてものどかで，楽しそうだった。

多喜二が死んでから，三吾と母と，阿佐ヶ谷を何か買い物に歩いていて，カルーソ(26)の「オ・ソレ・ミオ」のレコードが聞こえてきた。そうしたら，母が「そら，あんちゃんの歌だ」と言って立ち止まった。学校も行かない母がそのメロディーを知っていたのだった。

多喜二は，ゲーテの詩・チャイコフスキーの作曲による歌曲「ただわが心なやみきわめ」（あるいは「わが心　悩みぞ知らめ」）の楽譜を買ってきた。現在は，「ただあこがれを知る［者］のみ［が］」となっているものである。それは当時のレコードには入っていないものだった。それを，「ちょっとサブちゃん，ここをひいてみてくれ」とか，「この高い音を出してみてくれ」とかいうので，三吾も協力してやったが，弟の三吾は，「つまらないよ」「あ

(26) Caruso, Enrico (1873－1921)。イタリアのテノール歌手，オペラの歴史的名歌手。

んちゃん，だめだよ。これはレコードに入ってないし，うたうんだったらシューベルトとかブラームスとか，レコードにはいっているのがたくさんあるじゃないか」といったら，「いや，おれ，どうしてもこれ覚える」といって，彼はこれを歌えるようになった。いつのまにかものにしてしまった。

1978年にこの演奏を聞いて，三吾はとても感動した。すばらしい曲だった。「あんちゃん，だめだよ」と言った自分の言を反省した，と。今は恥ずかしいくらいです，と言う。

三吾は，朝は仕事だったが，あとは暇だった。多喜二は，三吾のバイオリンを聞いて，一度だけ「きたない［音だ］なあ」と言ったことがある。

中川則夫は，長橋中学で教えていた。また庁立高女でも教えていた。小樽音楽界の重鎮になった人である。彼は何でもやった。本当の専攻は，声楽であるが，器楽，つまりフルート，ヴァイオリン，ピアノを演奏した。小樽の器楽演奏を指導した。作曲もした。今でも歌われているものがある。当時中川則夫は庁商に音楽教師としていて，ある日，多喜二がやってきて，三吾にバイオリンを教えてくれと言って，連れてきた。多喜二は，兄弟姉妹思いだった。純真でナイーブだった。

多喜二自身もバイオリンを弾いた。友人の石本さんによると，ひいたそのバイオリンは多喜二の物だった，そしてかなりいい音を出した，と言う(27)。ただし，そのバイオリンは三吾さんのものだったかもしれない。

三吾氏は，後に札幌の中島交響楽団に入った。

多喜二が警察に捕まって，1930年8月に東京・豊多摩刑務所に収監されていた時，札幌の交響楽団にいた三吾は，差入れに秋に上京した。「兄を訪ねたんですが，刑務所の高いコンクリートの壁を見上げたときは，まったく心がちじむ思いでした。面会所にはいって，出て来る兄を見たら，予想外に明るい顔をしているんです。にこにこ笑いながら，まるで自分の家にでもい

(27) 石本インタビュー。ヴァイオリンが多喜二のものだった，と石本氏は前掲のように言うが，例の三吾さんにあげたものだったかもしれない。

るような感じで話すもんですから，逆にわたしの方がジーンときちゃって，……」[28]，「その頃シゲッティ[29]というバイオリンの大家が日本に来るということを聞きまして，友だちに聞いて見るんですが，クライスラーやハイフェッツ，エルマン[30]なんて一流の大家は知っていても，シゲティに関しては誰もよく知らないんです。何度目かの差し入れの時に，兄にそのことを話したら驚きましたね。」多喜二はすでにシゲッティ――世界的に有名なヴァイオリニスト――を知っていた。当時は，専門家も彼を知らなかった時代であった。多喜二はその時，シゲッティを「たしか，即物的な演奏をするハンガリーの近代的な演奏家で，今，向こうの若い者に人気があるんだ」と評した。「私は，自分の不勉強に恥じいったしだいです。」

そのうちに多喜二は，獄中から関鑑子(あきこ)[31]に三吾のヴァイオリンの先生を頼んだ。関は，橋本国彦[32]を三吾に紹介した。橋本は作曲家としても有名だった。

多喜二は昭和6年1月に，やっと保釈で解放されて，阿佐ヶ谷の駅近くに一軒借りて，小樽から母を呼び，三吾と三人で暮らした。1年半くらいで，多喜二は地下活動に入った。母は，兄が「毎日何を食べているか，そればかり心配していた」。その年1932年の10月に，シゲティが来日し，1932年12月9日，新交響楽団臨時演奏会でヨーセフ・シゲティが近衛秀麿の指揮で日比谷公会堂で，ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を演奏した。シゲティの二度目の来日であった。(みずの・あきよし調べ)

---

(28) 口述文。
(29) シゲティ（1892－1973)。ヴァイオリン奏者。ハンガリー生まれ，ブダペスト王立音楽院に学ぶ。13才でデビュー。世界各地で演奏し，1917年ジュネーヴ音楽院教授。1925年以降，アメリカに移住。日本へは，1932年，1934年，1953年の3回，来た。ヴァイオリン演奏で，ロマンチックな情緒を排除して，客観的態度をとった。
(30) Elman, Mischa (1891－1967)。ロシア生まれ，アメリカのヴァイオリニスト。
(31) 関鑑子（1899－)。ソプラノ歌手。1928年，プロレタリア音楽家同盟に参加。
(32) 橋本国彦（1904－1949)。東京音楽学校本科講師，助教授，作曲の教授。1934－37年，ヨーロッパ留学。

ある人が[32a]，多喜二と三吾氏にこの演奏会の隣り合わせ指定席入場券を贈り，二人の最後の対面を果たさせた。多喜二はこの時，非合法生活をしていた。

三吾氏は回想する。「わたしたち二人にとってこれほどすばらしい演奏会はありませんでした。あの頃の兄の仕事の忙しさと，危険を考えると，とても音楽を聞ける状態ではなかったのですが，兄は和服姿でにこにこ笑いながら階段を登ってきました。久しぶりに元気そうな，前と変わらない兄の姿を見て，私はほっとしたものです。シゲティの演奏は実に素晴らしいもので，第一楽章の最後のあたりで伴奏が止み，ヴァイオリンだけのカデンツァになり，それが終わってオーケストラが静かに入ってくる所あたりのすばらさに，二人は同時に顔を見合わせたんです。」[33]「実に素晴らしい演奏でした。第一楽章が終ったとき，あるいは第3楽章の時[34]，僕は兄の方をふりかえりました。すると兄は白いハンカチを眼にあてているのです。感動したんですね。それを見て僕も，ジーンと目頭が熱くなってきて，思わず顔をおおってしまいました。」「兄の目に涙が見られました。私も第一楽章が終わった時，眼鏡をはずし，ハンカチでそうっと目をふいてました。ベートーヴェンの心をこれ程みごとに表現できる人は，おそらくシゲティ以外にないと思いました。」[35]

「涙をふいて僕の顔を見ながらニッコリ笑顔を見せた兄の姿は忘れられません。」「三楽章のヴァイオリンとオーケストラの何回も何回もくり返し演奏されるあのテーマ，最後のところも，あれを聞いて兄は，自分の仕事にますます力がわいてきたのではないかと思われました。」[36]

「演奏が終って公会堂を出ると，さっきとは一変して，〝よかった，よかっ

(32 a) 宮本百合子だったのではないか，という話を小生は聞いたこともある。
(33) 口述文。
(34) 小林三吾，多喜二生誕80年　没後50年，小林多喜二をしのぶ夕べ，小樽。
(35) 口述文。
(36) 口述文；1958年パンフレット（小樽文学館）。

た″とくりかえしながら，″いい演奏だった，さあ，これから仕事だ，しごとだ，″といって別れていきました。シゲティの演奏を聴いて力が湧いてきたといった風情にも見えました。」(37)「手を振りながら階段をおりていった兄，とうとうあれが最後の兄の姿となってしまったのです。」(38)

後に三吾氏は，シゲッティの指揮する東京交響楽団で，メンバーとして演奏した。つまり1953年3月に三度目に来日したシゲティは，同じベートーヴェンの曲を東京交響楽団でひいた。丁度多喜二の死20年目にあたった。三吾氏も，多喜二との最後になった対面の日の感銘を，兄を奪われたつらい思いにかられ，泣きじゃくりながらオーケストラの一員としてヴァイオリンをひいた。「兄が生きていてね，きいてくれたら，それこそどんなに喜んでくれたろうと思って」。一楽章のおわりのあたりは涙が出て，三吾は楽譜が見えなくなった(39)。

7　父の死，家族

1924年8月2日，父の末松が小樽病院で死去した。多喜二に家のすべての責任がかかった。多喜二は，「これから，おやじ，おふくろに楽させようとしたのも束の間で」，父は「腸のやまいがもとで」なくなった。多喜二が「就職してわずか4カ月でした。漁村や農村にパンや大福餅を行商していたおやじにとっては，息子が銀行員になったということがどんなに自慢だったことか。行く先々で，兄のことを話して回ったということです。」(40)

多喜二は姉の結婚式に出なかったのだが，そういうものを無視していたのではなく，反対である。あるエピソードを，武田は語る。「一時期，ぼくと毎晩遅くまで飲み歩いた――というより話しこんで遅くなった。ところがある日，電話で，「今夜は駄目だ」というんだ。「今日は親父の法事があるか

(37) 小林三吾，小林多喜二をしのぶ夕べ（小樽）。
(38) 口述文。
(39) 口述文。
(40) 小林三吾口述「兄，多喜二のヴァイオリン」（高橋利蔵「小林多喜二の周辺」）

ら駄目だ。まっすぐ家に帰るんだ……」[41]。

家は，そうぞうしい家だというので近所でも有名だった。母が字が読めないから，兄弟みんなで母に新聞の記事だとか，本を読んで聞かせる。

外から帰ってきて，「おれが先だ」とか「私よ」とかいって，先を争って自分の話を母に聞かせてやろうとする。だから店にお客が来ているのも分からないでいる，またパンやまんじゅうを盗まれたことがよくあった。それでも，だれもこんどは気をつけて犯人をつかまえてやろうという気をもたない。母は，「なんぼかはら減ってたんだべよ」といって，かえって盗んだ人に同情しているくらいで，大笑いをしたことがあった。

三吾がバイオリンを弾く。多喜二は本を読んだりしている。姉や妹たちはとなりで勝手な歌を歌い出す。そんなとき三吾も，「バイオリンを弾いているときだけみんなちょっと静かにしてくれ」と言うのが，バイオリンを勉強する者には常識だが，不思議なことに，そんなことも全然なかった。

多喜二も，「うるさい」なんていったことはなかった。ただバイオリンの音がきたないときに，「何だそれは。ひどい音だ」といったことがある。それにたいして，三吾が，「いや練習のときは下手でも，演奏会のときにはうまく弾くよ」といったら，とたんに多喜二が怒って，「練習でちゃんと弾けなくて，どうやって本番でほんとうの演奏ができるか」とどなられた。それで三吾はぺしゃんこになった。

そのうちに，多喜二も家に二階，といっても屋根裏だが，細長いうなぎのようなものをつけた[42]。そうなってから，多喜二もちゃんと勉強できるようになった。多喜二は，便所へいくにも必ず新聞か本をもっていって，素手でいくようなことはなかった。

当時，漁師は漁がないと収入がないから，米でも味噌でも現金払いをしない。借金で買っては漁があれば魚で返したり，現金が入れば払うという風

(41)『北方文芸』1968年3月
(42) 後述の，瀧子がくる直前のことである。

だった。それで，借金がたまると，多喜二の家の前を通る時，漁師たちは顔を反対側に向けて行く。それを母がかわいそうだといって，家に呼んで，ご馳走してやったりした。

このあたりでは，「本食」(42a) を食べるのは，水産学校の校長先生とかお医者さん級の家だけだった。一般の人たちは，代用パンで間に合わせる。こどもがはだしで遊びまわっている家の人たちは，代用パンすらなかなか買えなかった。代用パンは，多喜二の伯父が発明したもので，ビルマ豆（大豆よりも少し大きくてうす赤い豆）を砂糖漬けにして，パンの中に入れたものだった。他に，あんパンだとか，クリームパンもあったが，代用パンだけがとても売れていた。

多喜二が銀行にはいって，漁師のとっちゃんなんかに，紅茶や「本食」のパンにバターをぬったのをご馳走できるようになったが，そうすると相手は，バターのにおいをかいだり，「砂糖入れるんかい，お茶に」，なんていって，気持ち悪がっている。多喜二が「とっちゃんなあ，みんな紅茶飲んだり，赤皮の靴はけるようにならなくちゃ駄目なんだよ」といった。――多喜二は銀行に赤皮の靴をはいて行った。漁師は自分で編んだ草履で，子どもははだしで歩いていた時代だった。――三吾たちはみんな想像できないから，げらげら笑ってしまう。そういうとき，多喜二の顔がほんとにかなしそうな表情をしていた。

多喜二は，外での行動とか自分の作品について，家のものには全然話さなかった。帰りが遅くなるときもあったし，銀行が終ってからだから，ずいぶん忙しいときもあっただろうが，三吾にはそういう話はしない。きっと，そういう方面に三吾が向いていないと思っていたのだろう。しかし三吾は，多喜二が社会科学関係の本を読んでいたことは知っていた。「一九二八年三月十五日」「蟹工船」「不在地主」と次々に書いているころだった。

三吾と顔をあわせたときには，ただバイオリンのことだけだった。帰って

(42 a) 食パンのこと。今でも小樽でその名で売っている店がある。

くれば，「今日は何時間練習した？」とか，三吾の方も「今日は四時間やった」とか嘘いって，多喜二を安心させたようなこともあった。

兄［＝多喜二］は心臓が弱いことはなかった。小樽にいるころ，近くの熊碓の海水浴場へよくいっしょに行った。平泳ぎでゆっくり泳ぐが，もう頭が見えなくなるくらい遠くまで泳いでいくので，三吾たちはハラハラさせられたものだった(43)。

多喜二がおかあさんにさからうようなことは，「なかったでしょう，きっと。母も，子供のいうことは何でもしてくれたし。」と，チマさんは言う(44)。

8　偽手紙

片岡亮一は，多喜二の庁商時代の親友である。また小樽高商にも1年遅れで入った。さて片岡の家の近くに小川医院の小川郁栄という美人がいた。片岡は美男子であり，片岡は彼女が好きだった。多喜二は彼女が美人だということを聞いて，好きになった。多喜二は美人にかんして露骨であった。ところで彼女は背が高かった。片岡はだから，多喜二にたいして「大木に蟬だ」と言った。

片岡亮一が，ある女性に思いを致して，その好きな女性とのいきさつがあって，会えないでいるのを，多喜二が知って，会えるように工作した。多喜二は，その女性の名で，片岡あてに手紙を寄せ，デートの促進をはかった。多喜二は茶目気があった。これは片岡が見破ったので何事もなかった。

多喜二は志賀直哉に傾倒していた。小林の21，2才の時，大正14年ころだった。その秋，小林が志賀直哉をまだ「卒業」しなかったころ，片岡は，その報復に，志賀の筆跡をうまく真似て，志賀直哉の名で葉書を東京の友人に託してわざわざ東京から投函させ，はなはだ念の入ったいたずらをやった。その文面は，ちかいうちに北海道へ遊びに行きたいが，講演会も開きた

(43) 小林三吾「兄の思い出」(『小林多喜二全集』第4巻月報4　1982年10月)
(44)『北方文芸』前掲号。

いから，準備ができたら日取りなどを前もって知らせてほしい，というのであった。

小林が島田に「志賀直哉から葉書が来て近々北海道へ行く，行ったら寄るということだ。来たら俺の家は狭いが，来て貰って，皆を呼んで会をやろう」とその葉書を見せた。志賀からは，前に，小林の「駄菓子屋」について批評を貰ったことがあるので，その筆跡を大体知っていたので，島田たちはよろこんだ。そして『クラルテ』の同人に知らせた。

島田が何かのついでに，片岡のところへゆくと，「小林がこの頃喜んでいないか」というのである。そこで志賀直哉の手紙のことを話すと，「そうだろうと思って，俺が書いたんだが，わからないのかな」と。実は片岡の字はあまり上手でなく，ちょっと雅味のある書体なので，確実に志賀の筆跡を知っていない島田たちはだまされてしまったのだった。

小林がそれを真に受けたのはいうまでもなく，さっそく会場の交渉やら宣伝につとめたりして返事を出したところ，志賀からそのようなことを頼んだおぼえがないという葉書がきたとか，その前に片岡が小林のあまりに熱心な奔走ぶりにたまりかねてとうとう白状してあやまったとか，どちらかであった。小林は，片岡はけしからんと言って，その時も大変おこった。しかし，小林はいつまでも根に持つということはなかった。ただし，そのために小林が片岡と一時であったが絶交した，と言う人もいる(45)。

片岡は，後年，日本銀行へ勤め，ニューヨーク支店へ行き，札幌支店次長になり，その後，預金局長になった。70いくつかで亡くなった。

9　武田の『クラルテ』加入

武田が札幌で多喜二をよく見かけているころ，「友人のS(46)が，小林からこんど『クラルテ』という同人雑誌を出すから同人になってくれ，なにか書

(45) 片岡亮一『緑丘』通巻42号，から。そして武田，島田の思い出から。
(46) 私の推定では，新宮正辰。

いてくれという話を，私［＝武田］のところへ持ってきた。まったく意外なプロポーズであった。『群像』［小樽中学派の同人誌］が廃刊になってまもないことで，だからいままでのように自由な発表機関を持てなかった私が，べつに新しい雑誌をほしいとはおもっていた。」

しかし武田はかつて多喜二の小説を黙殺したことがある。それは既述した(47)。その「手前もあって，いかにも物ほしそうな顔をして同人に加わるのは，とうてい私の気持ちが許さなかった。それに同人の顔ぶれは，私にはまるきり馴染みのない小樽商業と小樽高商の卒業生が中心となっている。顔も名前も知っているのは小林ひとりだった。かりに『群像』を中学派といえば，『クラルテ』は商業派だった。だから，たとえ誘われたからといって商業派の同人になったり，ものを書いたりしているうちには，どうしたって彼らとのあいだに摩擦がおきるのだ。人との融和力に欠けている自分の性格をかえりみてスムースにゆける筈がない……」

「それにしても不思議でならないのは，小林の態度であった。私のような異分子をわざ〳〵同人に加えようとする小林の心底がわからなかったのだ。小林の不思議さ。」かつて多喜二がやったように，「だいたい中学派の雑誌に商業学校の生徒が原稿をおくるなどは，われ〳〵の常識では考えられない。よっぽど自分の作品に恃むところがなければそのような不敵な行為に出られるものではない……。では小林がはたして不敵な自信家かというに，その小林が，こんどは私に『クラルテ』の同人に誘っているくらいに謙虚なのである。おもうに小林の性格のうちには，一貫して，学校のような閥的なものにとらわれない，わるくいえば無頓着な，よくいえば純粋なものがあるのではなかろうか。そして小林がほんとうに純粋な男だとすれば，いや純粋な人間でなければ，かつて自分の作品を黙殺した私を，こんどは自分たちの仲間に引きいれるわけがないのだ。」

(47) 拙稿「小林多喜二伝……」(『人文研究』88) 22ページを参照。

武田はクラルテ同人になった。

「私は，『クラルテ』の同人になってものを書くことになった。……小林の純粋さに自己反省をしいられた私は，小林といっしょに文学をやることに，自分としての新しい発足を見いだしたからであった。また，同人の中心が小林であってみれば，小林の異常というべき純粋さが一つの流れをなして『クラルテ』の文学精神を育てあげるにちがいないとおもったからであった。」(48)

七月に『クラルテ』第二集が発行された。多喜二はここに，小説「駄菓子屋」を発表した。

「『クラルテ』の第2号から私［＝武田］の小説がのったが，小林の例の没書のうき目をみた，「駄菓子屋」も，偶然のめぐりあわせであろうが，何年かぶりでやはり2号に活字となって，2人がはじめて肩をならべた。これは小林にとっても，私にしても，それからの二人の交友に一種ふしぎな忘れがたい機縁をつくった。しかし，機縁といえば，この2号がでるとまもなく私が急に小樽に転任したことであったろう。」さもなければ「八年にちかい，小樽時代の二人の文学的交友はついに結ばれずに終わったにちがいなかった。

そんな機縁が重なって，いままで第三者には説明のつかぬような関係におかれていた二人が，こんどはいきなり毎日のように顔をあわせることになった。小林を中心とする新しい文学仲間に加わった私のよろこびもさることながら，小林は小樽に住むことになった私を心からむかえてくれた。」

「そのころ小林は口癖のように，おれの小説を没にした君は，つまりはおれの文学の先生だ，という意味あいの言葉を冗談まじりでいった。しかし，これは冗談でも，皮肉でもなく，小林の本音だった。『駄菓子屋』は自然主義的作品だ，古いよ，と言葉だけではもっともらしい批評を誰からともなく

(48) 武田「回想の小林多喜二」(『小林多喜二研究』) 208－209ページ。

きいていて，それを金科玉條のように信奉していたのであろうか。もしそうだとすれば，彼は私を実質以上に買いかぶっていたことになる。私を計算する眼は最初から狂っていたことになる。

だが一方では，またそれだけに小林という男は，じつに単純素朴だと，おもった。私が「駄菓子屋」を没にした心理過程などは，およそ彼には想像のほかで考えられなかったことであったろう。私はこんなことでは人間心理の解剖はできない，小説は書けないぞと，彼のひたむきな文学への情熱にうたれながらも，もっと人間世界のうらおもてに通じなければなるまいと，思った。」(49)

10 『クラルテ』時代

片岡は思い出す。かなり極端な外股で，しかも胸を突き出し，肩をいからしたような歩き方の彼［＝多喜二］。1人の時は，やや厚みの口を一文字に結んで，考え深い目をしていた彼。しかも興が乗れば活弁の真似をしたり，にぎやかにはしゃぐ彼(50)。学校時代の多喜二の生活は物心共に決してめぐまれたものではなかった。彼の小説がプロレタリア文学に走ったのも故なしとしないわけである，と片岡は言う(51)。しかしこの点は既に述べた。

野口七之輔は中野清一（北海商業卒）に，多喜二は，同じ作品を何度も何度も念入りに時間をかけて書き直す人で，「その執念はちょっと，類がない」と言った。寺田も野口も，多喜二のことになると，立派な執念，という形容をよく使った。

地元・小樽には作家がいなかった。『クラルテ』は，大正一五年で終刊になって，その三年間で五集出た。定価は30銭であった。多喜二は，無駄のない引き締まった正確な文章を書き，それは志賀の影響だった。

---

(49) 武田「回想の小林多喜二」（『小林多喜二研究』）209－211ページ
(50)『緑丘』通巻42号から　片岡亮一の稿。
(51) 同。

多喜二が当時よく行った喫茶店「越路」は，妙見川のかどにあった。一階が洋品店になっていた。川下に向かってやや急な階段が二階に通じていて，喫茶店があって，細長かったが，かなり広い面積があった。テーブルその他の装飾品は古式蒼然としていた。コーヒーの真っ白いカップには，銀色の匙がおかれていた(52)。伊藤整が「卒業して……街の喫茶店へ行くと，よく多喜二と一緒になった。その頃彼は文学とともに社会問題に一層深い関心をもち，かつ恋愛問題も起こしていたらしい。叙情詩ばかりを書いている気の小さな私［＝伊藤］に，彼はプロレタリア文学の話などはしなかった。逢うと挨拶をし，多少文学の話をする程度であった。つまり私は教育しても駄目だと思われていたわけである。小林には人を区別して扱う所があったようで，たとえば彼ときわめて親しかった詩人林容一郎君をも思想的に誘い込むようなことをしなかったそうだ。」(53)

多喜二は，少し前から志賀直哉に自分の作品を，原稿ではなく，発表した本を送って求めていたが，第2輯の「駄菓子屋」について小じんまりと纏まっているが，こうすればこうなるという常識的なものだ，と批判されて少なからず参ったようだ。

『クラルテ』第三輯（1924年9月）の「仲間雑記」に，多喜二は，「前号の拙作『駄菓子屋』について志賀直哉氏が『日本の小説の型に小さく出来上がっているように思います。そして実感が弱く小説の臭いの方が強く思います。』と云われた。」と書いている(54)。

『クラルテ』の各号を出す時は，花園町のすし屋「蛇の目」や工藤書店の2階で，原稿を読み合わせて載せるか否かを決めたり，批評会をやったりした。

最後は花園町の工藤書店の二階で話合ったが，1度投稿したことのある米

(52) 大島「小林多喜二を思う」(『緑丘』42)
(53)『伊藤整全集』新潮社　第23巻，265ページ。
(54)『クラルテ』覆刻版を利用した。

山可津美（樽中，早大卒，当時小樽新聞記者）が出席して，「クラルテの作品には，殆どこうすればこうなる式の常識的なものばかりだ」と酷評された……。嶋田は言う。『クラルテ』の作品は，常識の一語につきると酷評されたことがある。皆も打撃を受けたが，多喜二はいつでも自分の作品は絶対的だという自信を持っていたから，特に打撃は強かった，と思う(55)。

初めは勢い込んで，大正13年に一，二，三輯を出したが，第四輯は大正14年，第五輯は大正15年と，ついに力尽きて終刊とせざるを得ない結果となった。結局島田は，財政的な問題がこういう結果をもたらしたのだと思っている。

「……『クラルテ』で小林が進んで書いたのが「赤い部屋」で，手塚英孝さんの書いた小林の伝記では，全部小林の書いたことになっているが，第四輯の分は新宮正辰のもので……」「あの中に出て来る岡田三郎は小樽中学出身で，新宮と母校が同じことから考えても，新宮の書いたものと，私は思っている。」しかしその第四輯には岡田は出ていない。

後に，余市実科高等女学校の文芸講演会で，多喜二と斎藤次郎，武田暹(56)が講演した。斎藤は，フランスのブウロニューの森の文学の話をした。島田氏は講演しなかった。この『クラルテ』の連中は文学的に威張っていた。小樽で沢山の同人誌が出ていたが，当時出た雑誌の内容が貧弱だというわけで，「パヤパヤ同人誌」または「パヤパヤ雑誌」と呼んでいた。

北海道の文壇について，武田（＝中津川）は書く。同人雑誌として良いものは，小樽で出た『白夜』であって，高田紅果もその同人の１人だったらしい。高田が，明治末期から大正中期にかけて，北海道の文化啓蒙活動に貢献した功績は，相当に高い。大正８，９年ころ北海道初の文化団体，啓明会が，組織され，高田が中心となり，大西猪之介，小熊（北大），たぶん早川三代治が会員だった。早川も作家として活躍する。有島武郎の影響力は大き

(55) 嶋田，『小林多喜二全集』の月報２
(56) 小樽中学卒。『クラルテ』の同人になる。小樽図書館に勤めた。

かった。「生まれ出ずる悩み」「カインの末裔」は，北海道文壇の特筆大書すべき第1頁である。小樽に『群像』がでた。主な小説メンバーは，高田紅果，米山可津味，新宮正辰，吉田広，本間勇児，上家重志，武田暹である。これに前後して北大に『平原』がでた。その後，『クラルテ』が出た。『群像』から新宮正辰，武田暹がそこに参加した。その他，代田茂樹の『路傍人』，上杉勇次の『路上』，斉藤勇三の『創人』，札幌で塚原貞良の『歩み』，が出た。高商系の『北方文芸』，北大系の『北大文芸』が出た。この大正中期から末期にかけての6，7年間が，同人雑誌による文学運動の開花期でもあり，同時に結実期でもあった。昭和からは文芸雑誌はほとんど出現しない(57)。

高崎は言う。彼・多喜二は相当酒を飲み(58)，まず勤先の拓銀からまつ直ぐ帰宅したことは一日もなかったであろう。たいていどこかの書店か映画館か喫茶店か呑み屋かにいて，誰かしらと芸術論，文学論に×(59)烈壮大な気瀬をあげていた。その情景から「ストリンドベルヒの「赤い部屋」を思うね……」とふたりで話したこともある。しかも「君子三日見えざれば……云々」で次に会ったときにはさらに数巻の書を読了していて，新しい事柄をスラリと延べ立てる。毎晩一二時より早く家に帰ったことはなく，それで銀行は一日の遅刻欠勤もなく，きわめて精勤，たえず三，四冊の本を携えてはいるが，いつそれを読むのか不思議でならなかった。恐らく二，三時間も睡眠していたかどうか，それが証拠に彼の目はいつもいわしのように「赤い目」だった。もちろん読書は文学書ばかりでなく，ウエルズの「世界文化史大系」も，ファーブルの「昆虫記」も，ヒルファーディングの「金融資本論」(林要訳) も，真つ先に彼は読んでしまつたものだ。その勉強振りにはホトホト感嘆してしまつた。従って彼が「蟹工船」を突然発表して一躍中央

(57) 中津川
(58) 実際はそれほど飲めなかった。
(59) 1字読めない。

文壇の新進キリン児として浮かび上がったときは，ちつとも驚かなかった。必然だと思ったから。……

……小林多喜二をわたしに初めて紹介したのは小樽高商助教授（当時）蒔田栄一君で，同君と二人で多喜二は富岡町のわたしの宅へ同人雑誌「クラルテ」発刊の話しを持ってきた。たしかそれは昭和4年の九月頃のことであった[60]。

ロシア語教師高崎徹は，高商に勤務の傍ら『小樽新聞』の主筆をした。戦争中に新聞統制のため『北海タイムス』と合併し，『北海道新聞』と改めたその編集次長となった。終戦後ストライキ事件があり，組合側と経営者側の板はさみとなる。当時の労働委員長は南亮三郎だった。解決後，高崎はジャーナリスト生活をやめる。その後，小樽の潮陵高校に勤めた[61]。

蒔田が，高商の教官になってから，外国文学のことでわからぬことがあれば，当時拓銀に勤めていた多喜二に電話すると，打てば鳴るように即座に答えてくれた。その読書と記憶力は抜群だった。多喜二は，蒔田にたいしては思想的なことを語らず，共産党員とか同調者とか疑われることがないようにと，配慮があった[62]。

伊藤整は書く。『クラルテ』の同人は，平沢哲夫，小林多喜二，武田暹などであった。彼らは東京の文芸雑誌の投書家として，その実力を知られている人間か，でなければ，短歌の盛んなこの町での，文学のヴェテランン達であった。……彼らはこの田舎町でいわば権威のある存在であった。私は，その平沢哲夫とは文通はしていたが逢ったことがなく，小林多喜二とは毎日逢っていたが交際がなかった。……小林多喜二はこの頃から社会主義的傾向を持つと同時に志賀直哉に傾倒し……[63] た。

---

(60) 高崎徹「多喜二は生きている —— つかれを知らぬ努力家」（小樽商大『緑丘』250号）
(61)『緑丘』13号，13ページ。
(62) 田中孝氏手紙。
(63) 伊藤整『若い詩人の肖像』

『クラルテ』は，悪口を書くのがうまくてね，と，藤橋(＝勝見）は言う。多喜二が書いていた『赤い部屋』がね，と島田[64]。

だが並木凡平[65]は，大正14年6月の『草木』（帯広）十一輯，で批判する。

「クラルテはほとんど創作を以て成り，小林多喜二君が専ら力を注入して居るが自己の才能を鼻にかけ，他雑誌を悪罵冷笑して居る衒学的態度は吾々の不快とする処である。」と。

武田は言う。「『クラルテ』時代に，小説の合評会をやったのです。生原稿を持ち寄って。そういう時の批評などを参考にして改作したこともありましょうね。とにかく，［多喜二は］自分の作品に対する批評を，猛烈に欲求してました。」[66]

一方，『クラルテ』以外にも雑誌が出た。伊藤整は書く。高商時代に「私［伊藤］と川崎昇の計画した雑誌は，三十二頁の真赤な表紙をつけて出来た。私は学友の中から，小林多喜二や片岡亮一のグループに属さない文学好きな生徒である池主隆治や白井孝一や水谷潔などを仲間に引き入れた」[67]。「私と高等商業学校の同級生の片岡亮一君，それから東京外語を出てこの学校の教師となって来た蒔田栄一氏，その他山内，吉岡というような人々が入って多分『新樹』という雑誌を出したのは，このグループの仕事であったと思ふ。」[68]

その時の片岡の作歌仲間は，先輩の山下秀之助，酒匂親孝，相良義重であり，特に親しかったのは，戸塚新太郎，朝比奈義郎，西岡徳蔵，西丘はくあ，山内実であった。片岡は，歌は，高商卒業2，3年でやめてしまう[69]。

---

(64)『北方文芸』1968年3月号。
(65) 口語短歌。小樽新聞の記者だった。本名，篠原静風。既述。
(66)『北方文芸』1968年3月　55ページ。
(67) 伊藤「雪の来るとき」。
(68) 伊藤「歌と詩の思い出」
(69) 片岡『雪田』より。

風間六三や伊藤信二などは，稲垣の家を巣として集まり，やがて同人雑誌『赤ゑ』を出す。これは3号くらいで終わった(70)。

林容一郎（平沢哲男）は，明治35年小樽市新地町生まれ，父は赤平に良応寺を開いた。『クラルテ』に参加し，1，2，4，5号に詩を発表した。昭和3年ころ上京した。上京後は，西条八十，野口米次郎に師事した。『三田文学』などに小説を発表したが，病気となり，札幌にひきあげた。昭和37年に没した。クラルテ時代は平沢，その後は，林の名で書いた。全一巻の『林容一郎全集』（昭和43年）がある。

武田は書く。「小林の小説の読み方はあしたにゲーテをむかえ，ゆうべにトルストイをおくるというような，いわゆる小説好きのするような気まぐれなものではなく，ゲーテならゲーテを，そればかりに何ケ月も食いさがっていた。彼はよく卒業という言葉をつかったが，彼にとって大切なことは，［それについての］卒業論文を書くことにあった。自分のゲーテ論，トルストイ論を組み立てることにあった。このばあい，敬服することは，いままでに発表されている作品批評や，その作品の解説や，その作家の評伝などを意識して読まぬことで，先入観念をつとめて排していたことである。作品と自分のあいだにのみ文学がうまれるものであると，小林が堅く信じていたことだった。」(71)

11　整の大熊フィクション

伊藤整の『若い詩人の肖像』には，たくさんのフィクションが含まれているが，大熊信行の『クラルテ』寄稿についても，その1つである。

整は，高商教授大熊信行が詩を作って，『クラルテ』に寄せたとする。大熊信行は，その記憶がなかったが，整がそう書いているので，寄せたかもしれないと，思い始めた。だが，『クラルテ』には大熊の作は出ていない。大

(70) 笠井清「小林多喜二と風間六三」（『北方文芸』）
(71) 中津川，245ページ。

熊も『クラルテ』が手元になかったせいか，確かめられなかったのではないか。

大熊は，しかし云う。「たしかに，『クラルテ』という雑誌は見た覚えがある。……小林多喜二から郵送されてきたもので，白表紙に誌名が赤く，横書きに刷ってあった。」(72) その通りである。大熊が小樽を離れたあとに，小林から雑誌がとどくことになる。

整によると，大熊の詩は少女賛歌であるとし，大熊はそれに驚いている。整が暗示している詩は，『クラルテ』にはない。つまり，全くのフィクションか，整が他人の詩を挙げているかである。

雑誌を送ることで，大熊は多喜二の性格を見ている。「多喜二の性格として，常人とちがっていたところといえば，平気で思い切ったことをする点にあったといえるのではないか。」『クラルテ』を送るとき，同時に手紙を入れていたが，「むかしの制度でいえば，同人雑誌のような第四種郵便の中に，第一種郵便として投函すべき便箋に書いた幾枚もの手紙を，恐れげもなく封中するといった常習が，その一つである。」(73)

12　銀行の女性たち

多喜二は自分で，頭の鉢が大きいと言っていたように，嶋田正策が多喜二の帽子を被ると，大きくて，目までおりてきてしまう。多喜二は身体は小さかったが，手はきれいな手をしていた。多喜二はいつも同じ茄子紺の背広で，それに渋い赤色のネクタイをよくして出社した。銀行で皆との付き合いもよく，好かれる人であった。

---

(72) 大熊信行『文学的回想』第三文明社，192ページ。
(73)『文学的回想』222ページ。
(74) 高橋（旧姓，中橋）ミドリは，1905（明治38）年9月9日，小樽にうまれ，緑町に育った。1922（大正11）年3月に庁立小樽高女を卒業し，4月に拓銀小樽支店に勤めた。多喜二より2才若いし，多喜二より2年前に拓銀に勤めたことになる。1927（昭和2）年夏に辞めたので，3年と少し，同じ職場にいた。

同僚の中橋（のちに，結婚して，高橋）ミドリは[74]，『クラルテ』を買ってくれ，と言われ，買って読んだ。彼女の女学校時代の友人に文学少女がいて，『クラルテ』を見せてくれというので，貸した。ところがそれを読んで，その友人は，「小林多喜二という人はずいぶんませたことを書く人だ」，と言った。多分，男と女の恋愛のこころもちを書いた作品だった。

多喜二が小説を書いていることは，銀行のほとんどの人が知っていたらしい。中橋ミドリは預金係にいて，その上司の茶碗谷徳次や，支店長の滝までが，彼女たちに，「あまり小林多喜二に近づくなよ，近づくと小説に書かれてしまうぞ」，などと冗談半分に言った。

中橋は言う。家で夜おそくまで小説を書いていたりするためか，多喜二は時に朝の出勤が少しおくれてくることもあった。しかしそんなときも，多喜二は行員たち専用の出入口から，ちょっと眠そうな顔をして入ってきて，すぐ右側に支店長や次長の席があったが，そちらに卑屈にお辞儀をするということもなく，昂然と頭をあげてその前を通り，奥の自分の席について仕事を始めるのだった。中橋にはそれがとても印象的であった[75]。

多喜二は忙しい仕事もきちんと手早くやるし，字も正確に書き，支店長もその点信頼していた。中橋たちにもとてもやさしくて，おもいやりがあった。

「銀行に勤めてから，多喜二は二人の婦人と恋愛めいたいきさつがあった。一人は佐々木キヌといい，一人はプラトーンという愛称でよばれていた笠原キヌであった。どちらも同じ銀行に勤めていた。しかし，それは恋愛といえるほどのものではなかった。むしろ幻滅に似たにがい感情を経験したにすぎなかった。」[76]

佐々木キヌは，拓銀の給仕であった。多喜二は彼女に惚れてしまった。多

(75) 佐藤静夫「拓銀時代の多喜二 —— 当時の同僚高橋ミドリさんからの聞き書き」(『文化評論』387，1993年3月号)
(76) 手塚英孝『小林多喜二』新日本出版，上，101ページ。

喜二は彼女について小説を書いている。「彼の経験」「龍介の経験」である。後者は改作されて，「And Again!!」になった[77]。1926年の多喜二の日記に，彼女について少し書かれている。だが暗示的で，何の事だかわからない。

ある日の拓銀で，給仕をしていた佐々木キヌが，大金庫の中で書類を棚から取り出すために，脚立に上がって働いていた。所が何かの拍子にコンクリートの床に落ちて，倒れてしまった。その物音で，銀行員が駆けつけたが，あれよあれよというだけで只見ているだけ。彼女は顔を打って血を出している。誰も助け起こそうともしない。小林は急いで洗面器を持ってきたりして手当をした。

彼女は人目をひく美人の方で，小林も一時は彼女にひかれた事があったが，「他の人が変に思うから」というふうに断られて，そのうちに遠ざかってしまった[78]。

佐々木キヌも笠原キヌも素敵な女性だったらしい。笠原という名は，多喜二は後に，小説『党生活者』のヒロインに用いるのだった。

笠原は，すらっとした痩せぎみの人で，銀行で給仕をしていた。多分，高等小学校出だった。高小出だと，行員にはなれず，給仕であった。当時多喜二と同僚だった中橋（高橋）ミドリは言う。笠原は伝票などを多喜二の机にもっていっては，何かじっと立っているような様子をしていて，そんなことが印象にある，と言う。「多喜二さんは確かに若い女の人にもてました。だけど職場の女性にあれこれと関心をもつというような人ではなかったと思いますね。」[79]

ただし，実際はそうでもなかった。多喜二は上記の2人の女性には興味をもった。それ以外の人には，女性としての興味は持たなかったのであろう。

---

(77)『小林多喜二全集』第7巻，所収。
(78) 島田正策の稿，『緑丘』42号
(79) 佐藤，113ページ。

中橋たちの上司，茶碗谷は，北海ホテルで内職をしていたらしく，時間がくると直ぐ，若い人を残して退社した。だから中橋たちは，よく，残業や夜勤などをやらされた。そんなとき多喜二も一緒に夜勤をして，当時小樽でやっていた活動写真の弁士――活弁――の真似を上手にしてみせたり，イタリア民謡の「ニーナの死」という当時流行っっていた歌などをうたって，皆をなぐさめた。中橋は言う。「上の人にへつらうことはなくて，弱いものに同情するという，よい人でした。私たちにとても親切だったのです。」(80)

行内での彼の評判はフェミニストといわれて，よくサンタルチアを口誦んでいたそうである。銀行慰安会でロシア民謡ニーナを歌ったことからニーナとニックネームをつけられていた(80a)。

旧姓(81)熊木照子(82)は，小樽の拓銀時代に多喜二と一緒に勤めていたことがある。かの女は当時，モダン・ガールであった。袴をはいて弁当を持って勤めに出かけた。きれいな人だった。銀行で上役あるいは支店長に叱られたり，あるいは勝気な彼女が職場でトラブルを起こす度に，多喜二がかの女をかばってくれ，いろいろと可愛がってくれた。多喜二はとてもやさしい人だった。彼は，かばう時も堂々とかばった。

その後のことだが，そんな，こんなで，多喜二の在樽中には，彼女は，よくいろいろな雑誌や，原稿を秘かに預かったことがあった。多喜二は遅くまで銀行で原稿を書いていることがあった。竜宮神社のお祭りの時だった。多喜二が追われて，照子の家にきた。彼女は，原稿や雑誌等を預かった。布団の中に縫い込んで隠したことがあった。また小樽で大掛かりな「赤狩り」（＝共産党狩り）が行われ，その時預かった物は相当部厚いものであった。

---

(80) 同。ここに，当時の拓銀小樽支店の内部の図が描かれている。ただし，現在の建物から見ると奇妙な図になっている。入口が逆である。印刷過程でまちがいがあったのではないか。
(80 a) 和田克己の稿，『緑丘』42，30ページ。和田は，中野清一の友人。
(81) 以下，及川清先生（小樽）からの聞き取り，および手紙。
(82) 及川先生の叔母。

油紙に包んだ雑誌のようなものを預けた。照子はやさしくしてくれた多喜二が好きであった。照子は色内支店から花園出張所へ配置替えになった。

多喜二は優しい人，特に女性には優しい人であった。

多喜二が拓殖銀行をやめる時，照子に「これ以上銀行に迷惑をかけたくない」と，語った。

片思いであったのか，多喜二が上京すると，彼女も追うようにして上京した。照子の姉(83)がひきとめたが，上京した。照子のもう1人の姉・清水やえが東京の日暮里に住んでいたので，そこに住んだ。多喜二とは実際には余り接触する機会はなかった。

若槻某の娘がハウスキーパーなどをして(84)，多喜二をしばらく経済的に支えていたようだ。多喜二は，女性に「惚れっぽい」人で，普通の人であった，と照子は思う。

多喜二が死んだ時，警視庁に行ったら，照子はそこで獅子文六とすれちがった。彼は行かない方がよい，と言った。彼女は，とても冷たいと思ったし，悲しかった。

多喜二の死後，彼女は小樽に帰ってきた。何か人が変わったように思えた。焦燥しきっていた。1年程で再び上京した。その後結婚して山畑となった。甥の及川氏は，多喜二についていろいろ叔母に尋ねたことがあったが，彼女は余り語りたがらないようで，それでも時折ポツン，ポツンと断片的に語ってくれた。

照子は，夫が消防の仕事のために勲章を貰うとき，つまり叙勲された時，受賞［式］に行かなかった。彼女の抵抗であった。

（本稿は，高商史研究会の活動の一結果である。）

---

(83) 及川先生の母。

(84) この句，小生確認とれず。そして初耳である。なぜなら多喜二の東京での非合法時代のハウス・キーパーは伊藤ふじ子だとされているからである。

訂正

「調査：小林多喜二『蟹工船』の読者感想」(『人文研究』78)(*)

		誤	正
p.72	18	母集団は	サンプルは
p.75	3	母集団から言って	[削除]
p.75	4	知っいてる	知っている
p.76	1	の母集団の	者の
p.80	19	そのもま	そのもの
p.85	26	人たちま	人たちの
p.86	17	情当	情熱
〃	18	後見	貢献

(*) 幾つかを中先生から教えを受けた。感謝している。

「島田正策小伝」(『人文研究』79)

ページ	行	誤	正
p.47	注(26) 5	正之輔	政之輔
p.48	3	運輸	運輸

p.48 の注(33)と p.50 の注(35)の内容が，逆になっている。

p.50	7	よること	やること

p.51 の注(39)と注(40)の内容が逆になっている。

p.54	14	2，3本	2，3
p.57	注(57)	人民戦争線	人民戦線

「小林多喜二伝……庁商の時代，後半」(『人文研究』88)

p.79　徳富 ——→ 徳冨